

「カテゴリー・エラー」と「前／超の虚偽」

——トランスパーソナル心理学の理論的基礎づけを図って——

村 島 義 彦

岡山理科大学教養部

(1989年9月30日 受理)

<はじめに>

「医学的唯物論（medical materialism）は、聖パウロがダマスカスへの途上でキリストの幻影を見たのは、大脳皮質後頭葉の放電現象のせい、つまりは彼がてんかん病者であったためだといって片付けてしまう。また、聖テレサはヒステリー患者であり、アシジの聖フランチェスコは遺伝性変質者に他ならないとして片付ける。…カーライルが世の悲惨を沈痛な調子で描くのは、胃腸カタルのせいだと説明する。すべてこのような過度に緊張した心の状態は、つきつめてみると、さまざまな腺の倒錯作用に基づく病的特異体質（おそらくは自家中毒）の問題に過ぎず、これは今後、生理学が明らかにしてゆくだろうとその論は主張する。そして医学的唯物論は、こうした説明でそれら人物のもつ精神的権威がうまくくつがえせたと考えるのである。」¹⁾。

上に引用したのは、プラグマティズムの大家として名高いウィリアム・ジェイムズの手になる『宗教的経験の諸相』中の一節である。ここに「医学的唯物論」として紹介されたひとつの姿勢ないし態度は、まさしくひとつの「論」、ひとつの「姿勢」、ひとつの「態度」であるにもかかわらず今日、そのワン・ノブ・ゼム（one of them）としてのあり方を超えてオンリー・ワン（only one）としての地位を確保しているといつても過言ではあるまい。自然科学の驚異的な発達によって各種の機械がわれわれの生活世界に浸入した結果、それら機械を日々の生活において多用するわれわれの中に知らず識らず、機械と人間をアナロジカルにとらえ、人間的現象の数々を機械論的あるいは生理学的に解釈づけようとする生物学的還元主義（ジェイムズの言葉を借りるなら「医学的唯物論」）の醸成されてくるのは、むしろ当然すぎる当然ともいえよう。

けれども、環境世界への機械の進出に大きくは支えられ、さらには、自然科学的な見方・考え方のマスターを現代の教養として義務づけられたわれわれの学習状況に助けられて、生物学的還元主義ないし「医学的唯物論」がどれほどに他の立場を圧して流行の主座を占めようとも、それ自体はやはりひとつの「主義」ないし「論」であることをやめることはできない。なるほどそれは、魅力にあふれた強力かつ有力な「主義」ないし「論」ではあるであろうが、その魅力性、強力さ、有力性のゆえにワン・ノブ・ゼムとしてのあり方を

やめて、直ちにオンリー・ワンの地位を獲得するわけではない。加えて、この立場の徹底と一貫は冒頭にも引いたジェイムズの指摘内容、すなわち聖パウロを「てんかん病者」、聖テレサを「ヒステリー患者」、聖フランチェスコを「遺伝性変質者」、カーライルを「胃腸カタル」と診断する、聖者ないし偉人に備わる当の聖者性ないし偉人性のすべてをノーマル以上の何ものかとしてではなく、あくまでもノーマル以下の何ものか、つまりは病気ないし異常として解釈づける極端な脱神聖化を導き出さずには措かない。こうした脱神聖化はしかし、あまりの極端さと徹底のゆえにわれわれの一般常識から見てかなり無理のある、こじつけの感を免れえない一種の不自然さを有するのであるまい。

われわれのもつ常識に忠実である限り、聖パウロ、聖テレサ、聖フランチェスコ等の聖者たちは当の聖者性において常人以上と解釈され、カーライル等の偉人たちも、当の偉人性において常人以上と解釈されるのが普通であろう。このように、極端な脱神聖化に覚えるわれわれのとまどいと異和感がかなり一般的なものである以上、われわれには、脱神聖化そのものへの再度の問い合わせ少なくとも要求されているのであるまい。こうした問い合わせはところで、トランスパーソナル心理学にとってとりわけ避けて通ることのかなわぬもののひとつであった。この心理学はその名の通り、われわれの日常世界が暗黙に前提する、あの自／他の区分のゆらぎと解消を経た超個（トランスパーソナル）の世界一般を研究の対象とする。そうである以上、自らの対象領域に領域としての市民権を与えないで済ますことはできず、当然、上にみた脱神聖化に対してもしかるべき理論的対応を講じているはずだからである。こうした理論的対応のひとつとしてわれわれは、ケン・ウィルバーの訴える「カテゴリー・エラー（範疇錯誤：category error）」および「前／超の虚偽（pre / trans fallacy）」への強い戒めを挙げないわけにはいかない²⁾。「カテゴリー・エラー」、さらにはその一形態としての「前／超の虚偽」こそは、トランスパーソナルな現象一般を無視あるいは否定し去る今日的風潮が見事に陥りつつもそれと気付かない、始末に困る陥穰の最たるものに他ならなかったからである。

そこで以下、この「エラー」の何であるか、この「虚偽」のいかにあるかをウィルバーの著作『Eye to Eye』の内に探ってみよう。両者の浮き彫りを介して、極端な脱神聖化ないし生物学的還元主義の依ってきたるゆえんはおのずと開示されるであろうし、それは同時にまた、トランスパーソナル心理学の理論的基礎づけを図る上に避けて通ることのかなわぬ行程でもあろうからである。

<1> カテゴリー・エラー（範疇錯誤）

(a) 科学主義を問う

今日を代表する傾向のひとつに他ならない脱神聖化の背後には、先にも触れたように、それを支える強力なリアリティとして自然科学に立脚した高度産業機械社会の大々的な躍進がある。この躍進をバックに自然科学的な見方・考え方は今日、それのみが科学的で客

観的な見方・考え方そのものであるかのような誤解を、われわれの内に生み出してもいる。自然科学に代表される経験論的で分析的（empiric-analytic）な研究のあり方³⁾が科学そのものと同一視され、科学とは経験論的で分析的な研究を指いてないといったいわゆる「科学主義（scientism）」が、われわれ一般の隠れた常識としてどれほどに広く確立されているかは改めて指摘するまでもあるまい。だが、いかに広く確立されているにせよこうした経験論的・分析的な研究は元々、靈感の生んだ「靈の書」としての『バイブル』に依拠してこの世の事柄——たとえば人類の起源や地球の構造等々⁴⁾——の一切を説明づけた上で、異説の介在を頑なに拒み、断罪をくり返したところの教会勢力によるあの不当な知の支配に抵抗して、ガリレオとケプラーが、魂の世界についてはともかく、われわれの五感ではっきりと促えうるこの事実の世界に関しては、五感という「肉の眼（the eye of flesh）」のみを用いて立ち向かうべきことを強く訴え、実験と測定に依拠して諸々の考察を押し進めたところにその端を発していたといってよい。「あるひとつを除くすべての変数が一定となるような状況を考え出し、そのひとつの変数を変えながら何回か実験を重ね、その上で結果を検討する」⁵⁾というのが、その際に採られた実験と測定の基本様式であった。こうした中から次々と、単にこれまでの思弁のみからは促えることのかなわなかった新事実⁶⁾が数多く見い出されて、結果として、「身辺の現象の中から測定可能（measurable）な要素を探し出し、その上でそうした物理量同士の関係を求める」⁷⁾というあり方が、経験論的・分析的な研究の基本ルールとして確立されるに至った。経験論的・分析的な研究とはこのように、われわれの「肉の眼」を介して検討される諸々の知識を効果的にまとめ上げたひとつシステムに他ならない。「肉の眼には肉の眼のことを語らせよう（Let the eye of flesh speak for the eye of flesh）」⁸⁾というガリレオとケプラーを貫いてあった姿勢にこそ、この研究のそもそも成立の意図は求められるからである。

およそこうした成立の由来と内容的特色を備えた経験論的・分析的な研究は、当の事実的認識に積み重ねの効くところから加速的な発展を遂げ、今日、なされた業績の多さと大きさに関する限り、少くとも疑いをはさむ者はいないのではあるまい。この輝かしい実績はしかし、他ならぬこの研究を「科学主義」へと導き入れる負のアクセルとして作用した。経験論的・分析的な研究は、自らの依拠する「肉の眼」のあまりに大きなパワーに酔いその効驗を誇るあまり、「肉の眼で見えないものは経験論的・分析的に立証できない（cannot be empirically verified）」から「肉の眼で見えないものは存在しない（does not exist）」⁹⁾へと、あるいは、「五感の領域にはすぐれた知識獲得の方法がある」から「したがって、その他の領域で得られた知識は無効である（is invalid）」¹⁰⁾へと、大胆にも越境してはばかりなかったからである。だが、経験論的・分析的な研究にあらざれば科学にあらずといったこの姿勢、あるいは、立証可能性を感覚経験による立証可能性にのみ極限するこの立場はまさに、部分が全体を装うひとつの虚偽に他ならない。ガリレオとケプラーに先立つ昔、『バイブル』の権威に訴えて教会勢力が、「バイブル型科学主義」とで

も名づけるべき形で知の世界を支配したのと同様、今日では、この支配からの脱却を訴えかつ実践した当の科学そのものが、あろうことか同じ誤りをくり返している。自らの努力と訴えの帰結がこのような逆の「科学主義」である現実を目にした時、ガリレオとケプラーなら果たして何と言うであろうか。

みずからに見えないものは、そのまま正直に「見えない」と告白するかあるいは沈黙を守ればよいところを、あろうことか、そうしたものは「存在しない」と公言してはばかりない厚顔によって、経験論的・分析的な研究は、肉以外の眼で捉えられる現実についてもやはり、的外れなことにも、肉の眼を基準にその妥当性を判定する他はない。そして、肉以外の眼をすべて否定し去る限り、聖パウロを「てんかん病者」、聖テレサを「ヒステリー患者」、聖フランチェスコを「遺伝性変質者」、カーライルを「胃腸カタル」と診断して顧みないあの解釈はあくまでも正しいといわねばならないであろう。問題はしかし、われわれに備わった認識の眼が果たして、「肉の眼」のみに尽きるのか否かの点である。東西の伝統に少しでも耳を傾けるなら、いわゆる「感覚野（sensibilia）」を対象域とする「肉の眼」に加えてさらに2つ、「理知野（intelligibilia）」を相手どった「理知の眼（the eye of reason）」と、「超越野（transcendelia）」を相手どった「瞑想の眼（the eye of contemplation）」の存在に注意を促すいくつかの声を、われわれは遠く耳にするのではあるまいか¹¹⁾。直角三角形に関するピュタゴラスの定理（ $c^2 = a^2 + b^2$ ）といった、数学的な知識の妥当性を検証するのが「肉の眼」ではなくて「理知の眼」であるように、宗教的な啓示の妥当性を検証するのも、「肉の眼」ではなくて「瞑想の眼」であるというべきであろう。上にみた脱神聖化ないし生物学的還元主義はそれゆえ、「肉の眼」の領分を、「瞑想の眼」の領分にまで押し入らせたカテゴリー的な混乱、つまりは「カテゴリー・エラー」の好例とみることができる。

科学主義という「カテゴリー・エラー」に色濃く染め上げられた経験論的・分析的な研究はところで、主張内容の点でも、明らかに論理矛盾を含んでいるといわなければならぬ。先にも見たようにこの研究は、「経験論的・分析的な証明は感覚領域における事実の入手には最適の方法である」と言うべきところを、あろうことか、「経験論的・分析的に立証できる命題のみが真実である（only those propositions that can be empirically verified are true）」¹²⁾と主張した。だが、「経験論的・分析的に立証できる命題のみが真実である」というこの命題は、果たして、「経験論的・分析的に立証できる」のであるうか。冷静に見れば明らかなように、「経験論的・分析的に立証できる命題のみが真実である」という命題は、命題というよりはむしろこの研究の態度表明に近い。態度表明的なものである以上、それを「経験論的・分析的に立証する」ことなどそもそもできようはずがない。だが、この命題に忠実である限り、「経験論的・分析的に立証できない」命題はあくまでも「真実とはいえない」のであるから、この命題も、つまるところ虚偽と判定されざるを得ないであろう。要するに、「科学的真理の他に真理はない」という主張は、それ自

体、科学的真理ではありえない」¹³⁾ わけである。こうした論理矛盾を含む点で科学主義は、相対主義によく対比されもする。「万物の尺度は人間」というプロタゴラスの言葉に代表される相対主義は、アイロニカルにいうなら、 “すべては相対的であって、絶対的なものなどありえないということこそ、唯一絶対の事柄である” という立場ないし主張であった。この立場ないし主張が自らの内に、隠すことのできない論理矛盾を含んでいることは改めて指摘するまでもあるまい。というのも、「すべては相対的である」という自らの主張内容にあくまでも忠実である限り、相対主義の絶対性を訴える自らの主張はむろん否定されざるを得ないし、さらには他方、「相対主義の絶対性」などということがそれ自体、まさに相対主義の否定に他ならないからである。相対主義にせよ科学主義にせよ、共にその内に明らかな論理矛盾を含みつつもしかし、その力と説得性は、われわれの内にあって何ら衰えを知らない。

こうした科学主義の乗り超えは、ではいかなる方向に求められていいのか。科学主義とは要するに、「肉の眼」を介して得られる経験論的・分析的な知識を、ワン・ノブ・ゼム（数ある知識のひとつ）としてではなくまさにオンリー・ワン（知識として唯一のもの）として見る立場を意味する以上、上の問いは逆に、経験論的・分析的な知識がオンリー・ワンではなく、まさにワン・ノブ・ゼムに他ならないことを証しする方向に、具体的にはたとえば経験論的・分析的な知識とは別種の知識が、そもそもどのようにして立証されるかを問う方向に問われてしかるべきであろう。われわれはしかし、これを問うに先立ち予備的な作業としてまず、知識をまさに知識として成立させる基本的な3条件について少し触れておかなくてはならない。さて、知識のそもそもの源については、われわれの直接的経験（「感覚野」のそれ、「理知野」のそれ、「超越野」のそれを問わずとにかく）を挙げる他はないであろうが、では、こうした直接的経験の他ならぬ基本データとしての妥当性を確かめる手立てとして、具体的に、いかなる方法が考えられるであろうか。何らかの直接的経験が基本データとしての妥当性を保証される時、そこには、およそ次の3条件が例外なく満たされていると思われる。まず第1に「介助的指示（instrumental injunction）」、第2に「直観的感受（intuitive apprehension）」、第3に「共同体的確認（communal confirmation）」である¹⁴⁾。あるデータの妥当性を探るにあたります必要なのは、「もしこれを知りたければこれをせよ」といった形の具体的マニュアルの提示であろう。第1の「介助的指示」とはこれをいう。次いでわれわれは、マニュアルに基づいて行動し、対象分野での直接的な経験を得る。第2の「直観的感受」とはこれをいう。われわれはさらに、自らの経験内容の真偽を確かめるべく、第1と第2のプロセスをしかるべき完了した他の同胞たちの前に結果を公表し、その照合と確認を図らねばならない。第3の「共同体的確認」とはこれをいう。

今、経験論的・分析的な研究の一例ともいるべき「水の電気分解」を選んで、 $H_2O \rightarrow 2H + O$ （水を電解して得られる水素ガスと酸素ガスの容積比は2対1となること）の妥当性が

いかなる手順で立証されるかを見てみよう。われわれはまず、これを立証するにあたり、電気分解の基本的技術をマスターし、電解装置を作成し、実験そのものを実施し、ガスの収集を行なわなければならない（「指示」の段階）。次いで第2に、収集したガスの容積を測定しなければならない（「感受」の段階）。そして最後に、「指示」と「感受」の両段階を共有する他の研究者仲間とデータそのものを比較し照合しなければならない（「確認」の段階）。こうした照合と確認を経てはじめて、2対1という容積比は立証されるのである¹⁵⁾。以上の電解の例からも明らかなように、われわれのデータがまさにデータとして有効であるのは、それが、「指示」「感受」「確認」の手順を正しく経ていることによる。経験論的・分析的な研究の特徴はそれゆえ、データを立証する当の方法論がきわめて厳密かつ精緻な点もさることながら、それよりはむしろ、データそのものが徹底して「肉の眼」の領分に属するという点に求められるのではないか。経験論的・分析的なデータが、いわゆる立証されたデータとして知識にあずかりうるのは実に、それが「感覚野」に属し「肉の眼」ではっきりと促えられうるからではなく、「指示」「感受」「確認」というあの手順を正しく経っていることに依るといってよい。

(b) スピリチュアル・サイエンスの可能性

知識成立の基本条件をあくまでもこうした手順の内に求めるなら、われわれは、経験論的・分析的な研究とは別種の研究についても同様に、「サイエンス」の名を与えることが可能となるのではないか。たとえば、心的・現象学的な研究に属すると思われるフロイトの精神分析学は、無意識・トラウマ・抑圧に関する諸々のデータを収集するにあたり、次のような手順をはっきりと厳守していた。すなわち、自由連想法や夢の分析といった無意識探求の具体的方法をまず提示し（「指示」に相当），それによって得られた各種のデータを克明に記録した上で（「感受」に相当），そうしたデータを今度は、同様な資格を備えた他の研究者から成る共同体の内でつぶさに比較し確認してもいる（「確認」に相当）。精神分析学はそれゆえ、自然科学的な知識とはいささかタイプを異にする知識から成る、同様にひとつの「サイエンス」ということができよう¹⁶⁾。さらに今ひとつ、経験論的・分析的な研究とも心的・現象学的な研究ともタイプを異にする、いうならば靈的・超越的な研究とでも呼ぶべき禅の場合にはどうか。ここでもやはりわれわれは、「指示」「感受」「確認」というあの3段階を見い出すのではあるまいか。禅には明らかに、「もし、<仏性>の有無を知りなければまずこれをせよ」¹⁷⁾と命じる座禅に関する具体的教示があり、座禅を介した<仏性>の直接的感受があり、感受された内容を禅師や同行の瞑想者から成る共同体の内で慎重に確認し合う作業があるからである。こうして禅もまた、自然科学や精神分析学とはいささかタイプを異にするものの、それ自体としてはやはりひとつの「サイエンス」ということができよう¹⁸⁾。

このように見ていくと、「感覚野」のサイエンス、「理知野」のサイエンス、「超越野」

のサイエンスを問わず、およそその分野の「サイエンス」に発言資格をもつか否かは、当の本人が、その分野の与える具体的「指示」に従って特定の眼を訓練しあえたか否かをもって判定されるといつても過言ではあるまい。特定の「指示」に基づいて厳しく訓練された眼は、その分野におけるまさに「公的な眼（a public eye）」¹⁹⁾に他ならない。それゆえ、「もしもある人が特定の眼を訓練することを拒んだとすれば、それは見ることを拒んだに等しく、われわれはその人の意見を無視し、共同体的証明に関する票決から除外」²⁰⁾し去ってむろん構わないことになる。こうして、仮性ないし靈的本性の内在について、その証明をしつこく迫る人たちに対しわれわれができる最善のことは、靈的・瞑想的な知識を得る具体的方法（座禅やヨーガ等）について説明し、「あとは御自分で確かめてみなさい」と通告する以外にはありえない。 $H_2O \rightarrow 2 H + O$ といった化学的知識が訓練された化学者にとっては公的な知識であり、直角三角形に関するピュタゴラスの定理 ($c^2 = a^2 + b^2$) といった数学的知識が訓練された数学者にとっては公的な知識であるように、仮性等に関する瞑想的知識もまた、訓練された瞑想家にとってはむろん公的な知識としてあるからである。

サイエンスはこうして、その対象領域を異にして大きくは3つ成立することになる。すなわち、物理学、化学、生物学、天文学、地質学等のいわゆる「感覚野」のサイエンス、言語学、数学、論理学、心理学、現象学、哲学等のいわゆる「理知野」のサイエンス、禅、ヨーガ等のいわゆる「超越野」のサイエンスである。最後に挙げた「超越野」のサイエンスとしての「スピリチュアル・サイエンス（spiritual science）」ないし「ガイステス・ビッセンシャフト（Geisteswissenschaft）」は、ところで、一般にはどのような形態をとって目にされるのであろうか。その形態は、超越野の知が大きくは2種に類別されるところから、これに呼応して、同じく2種に類別することが可能であろう。すなわち、「マンダラ的科学（mandalic sciences）」と「グノーシス的科学（gnostic sciences）」である²¹⁾。たとえばわれわれは、超越野の何であるかを探求するにあたり、一応は、「肉の眼」以外の2つの眼を用立てることができる。そして、論理に訴えて対象の描き出しに努める「理知の眼」がこの超越野に向かう時、描き出された領野そのものは、あるいは逆説的（paradoxical）なあるいはマンダラ的（mandalic）な装いをまとめてわれわれの前に現われ出ざるを得ない。この領野のロジカルな描き出しが当の論理性と整合性を消失し、あるいは逆説的なあるいはマンダラ的な形をとるのは他でもない、この領野そのものに、自／他の区分を超えたトランスペーソナル性、2元の融合したユニティ性など、論理をはみ出す特性の数々が強く付着してみられるからである。A. マズローは、この領野に触れて得られる人間的特性を次のように描いている。「同時に利己的であって非利己的であり、ディオニュソス的であってアポロン的であり、個人的であって社会的であり、合理的であって非合理的であり、他と溶け合っていて他から離脱している…、非合理性、対立、完全な矛盾の存在とその知覚が同時的に成立しているのだ」²²⁾と。こうした人間的特性を導き出す当のリアリティを論理に訴えて描き出そうとすれば、描き出しの言葉はおのずからに、「Aであって

「Aでない」といった逆説の形か、「AかBか」ではなく「AもBも」といったマンダラの形をとる他はあるまい。とはいえるが、逆説的あるいはマンダラ的であるのは、この領野のロジカルな描き出しを図る言表の方であって、超越野そのものが逆説的あるいはマンダラ的なわけではない。「<靈>としての<靈>は断じて逆説的ではない。…しかし、それを心的な言葉に直す(put)と結果として逆説性が現われ出る」²⁴⁾に過ぎないからである。それゆえ、この超越野を「理知の眼」ならぬ「瞑想の眼」をもって直接に映し出すなら、それは、逆説性とマンダラ性を超えた靈知としてのグノーシス(gnosis)となる。

このように、超越野を対象とした知は大きく、逆説的・マンダラ的なタイプと靈知的・グノーシス的なタイプに分かたれざるを得ないが、両者は、ではどのような関係の中にあるのであろうか。超越野をそのままに映し出すグノーシスは、これを間接的に描き出す逆説的・マンダラ的な知に比べ、いうならば「リアリティそのもの(reality itself)」と「リアリティの描像(pictures of reality)」²⁵⁾の間に認められる差ないし距たりを有すると思われる。一方は実物で他方はその模像、一方は食事で他方はそのメニュー、一方は領土で他方はその地図といった関係のあてはめが可能であるとすると、この「模像」的で「メニュー」的で「地図」的な知を中心としたタイプの「スピリチュアル・サイエンス」は、超越野の特色を間接的に教え、グノーシスを準備する先触れとしてなるほど有益ではあるものの、他方、「実物」的で「食事」的で「領土」的な知としてのグノーシスそのものに置き換わることはあくまでもできない。超越野の感受は、基本的に、「瞑想の眼」に訴えて得られるグノーシス以外にはありえないからである。「スピリチュアル・サイエンス」の核心はこうして、当の領野に即応した「指示」「感受」「確認」の3要件を満たす手順そのものを実践して、各人が直接にグノーシスを得ること（つまりは禪、ヨーガ等の「グノーシス的科学」）にあるといってよい。

以上、科学主義を問い、スピリチュアル・サイエンスの可能性を探るという方向で「カテゴリー・エラー」の浮き彫り化に努めてきたが、こうした「エラー」を乗り超えるにあたりますもって要請される最低のことは、各人が、自らの陥る「カテゴリー・エラー」に容赦と妥協のない監視をくり返すという、地味ではあるが仲々に困難な日々の努力であろう。われわれは、このためにも次の4点をたえず自らに反覆しなければならない。すなわちまず第1に、すべての人間が「肉の眼」「理知の眼」「瞑想の眼」を備えていること、第2に、それぞれの眼にはそれに対応した独自の対象域として「感覚野」「理知野」「超越野」の在ること、第3に、それゆえ一方の眼を他方に還元したりその観点から説明づけたりはできること、第4に、それぞれの眼はそれぞれの対象域では有効かつ有用なもの、それ以外の対象域に向かうと誤りを犯さざるを得ないこと、である²⁶⁾。

<2> 前／超の虚偽

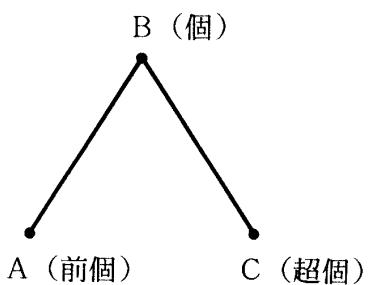
われわれはこれまで、生物学的還元主義ないし脱神聖化の今日的極端に本能的な異和感

を覚え、この異和感の依ってきたるゆえんを追求して、その源の中心を「カテゴリー・エラー」の内に見い出した。ところで、生物学的還元主義ないし脱神聖化はそれ自体、なるほどカテゴリー・エラーではあるにしてもいうならば「特定の」カテゴリー・エラーに他ならず、あえて命名を施すとすれば、「プレ／トランスのカテゴリー・エラー」あるいは端的に「前／超の虚偽」と呼ばれるのが妥当であろう。われわれの内的発達は、イエスやシャカに代表されるきわめて偉人的・聖的な境位をもその内に含み込む時、前合理から合理を経て超合理に至る一連の行程として描き出すことも可能であるが、その際に問題なのは他でもない、前合理と超合理がともに、合理ならざるものとして安直に同等視されがちなことである。「前／超の虚偽」とここにいるのは、こうした同等視の誤謬に他ならない。

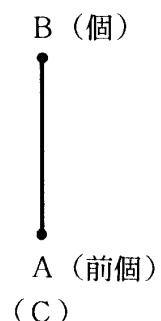
(a) 2つのPTF (PTF-1とPTF-2)

「前／超の虚偽」(pre/trans fallacyを略して以下PTFとする)については、たとえば具体的に、すべての神秘主義を徹底して否定する試みや、その逆にすべての神秘主義を徹底して擁護する試み等を、その例として挙げることも可能であろう。前者における徹底した神秘主義否定では、超合理的すべてが、いうならば前合理にまで引き下げられる形で前／超の混同がなされているのに対し、後者における徹底した神秘主義擁護では、逆に前合理的すべてが、いうならば超合理にまで引き上げられる形でやはり前／超が混同されているからである。「前／超の虚偽」ことPTFにはこのように、大きく、「超合理的領域が前合理的状態に還元される (are reduced)」、あるいは、「前合理的領域が超合理的榮光へと引き上げられる (are elevated)」²⁶⁾という2通りのコースが確認されるといってよい。こうしたPTFを今、便宜的に図示すると以下のようになるであろう<図1, 2, 3>。

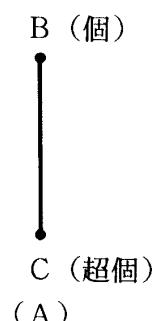
<図1>：本来の姿



<図2>：PTF-1



<図3>：PTF-2



<図1>では、A→B→Cの発達コースが一応は鋭角を描いているものの、本来はむろん直線である。<図2>では、この直線がBを中心として折れ曲がり、CがAと重ね合わされた結果、CそのものはAに解消あるいは還元され、発達はAとBの間で（つまりはCを抜いて）論じられることになる。超個のすべてを前個へと「引き下げる」、PTE-1の成立である。<図3>では他方、この直線がBを中心として折れ曲がり、AがCと重ね合わされた結果、AそのものはCに解消あるいは還元され、発達はCとBの間で（つまりはAを抜いて）論じられることになる。前個のすべてを超個へと「引き上げる」、PTF-2の成立である。

だが、超個を前個に引き下げるPTF-1にせよ、前個を超個に引き上げるPTF-2にせよ、前／超の精妙な差も感知できぬ粗雑なアンテナをもって、果たして、精妙の上にも精妙なわれわれの内面世界を探査することなどできうるのか否か。「前時間性（pretemporality）」と「超時間性（transtemporality）」、「前自我的衝動（preegoic impulsiveness）」と「超自我的内発性（transegoic spontaneity）」、「前個的な無知（prepersonal ignorance）」と「超個的な無垢（transpersonal innocence）」、「前言語的な衝動（preverbal impulse）」と「超言語的な洞察（transverbal insight）」、「前個的な融合（prepersonal fusion）」と「超個的な一体性（transpersonal union）」といった各ペアは²⁷⁾、内的境位の質的な差を描き出す術語として的確に用いられることがなければ（つまりは、こうした術語の区分的必然があいまいにしか解されず、結果として術語の混同が生じている場合には）、人間心理の精妙な世界はモノクロ化し、貧困化し、奇型化せざるを得ないであろう。心理学におけるフロイト的な姿勢とユング的な姿勢は、互いに方向を異にはするものの、等しくモノクロ化、貧困化、奇型化の実例として促えうるのではあるまい。

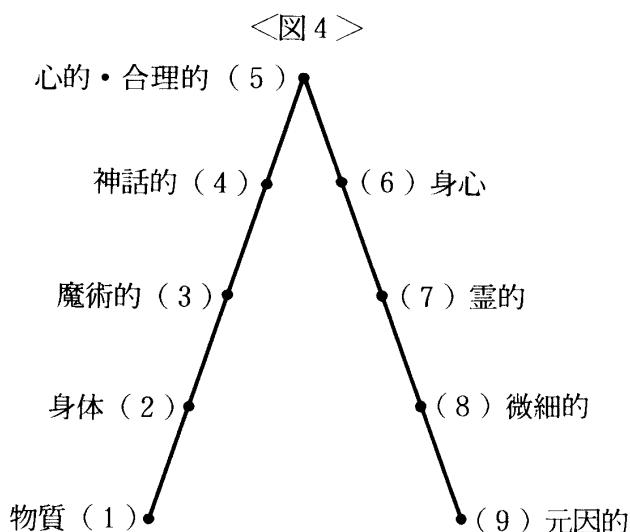
フロイト的な姿勢においてとりわけ著しいのは、前個的なイドと個的エゴの間にはっきりと一線が引かれ、<図1>にみたA／Bの区分は正しく確立されているものの、他方、「超個的一体性」は「前個的融合」へ、「超時間的洞察（transtemporal insights）」は「前時間的イド衝動（pretemporal id - impulses）」へ、「超<主／客>的三昧（trans-subject/object · samadhi）」は「前<主／客>的ナルシズムに向けての退行（a throw back to presubject narcissism）」へと²⁸⁾、超に関わるもの一般がおしなべて、前に関わるもの一般に意図して解消されることである。ここに認められるのは、あのPTF-1に他ならない。他方、ユング的な姿勢においてとりわけ著しいのは、個的領域と集合的領域の間にはっきりと一線が引かれ、B／Cの区分は正しく確立されているものの、今度は逆に、前個の領域と集合的領域の区分があいまいなままに残されていることである。そして、無意識的な前個の状態（A）は無意識的な超個の状態（C）と錯覚され、「前個的領域が疑似超個的状態（quasi-transpersonal status）に昇格」²⁹⁾した結果、発達のコースは、無意識的超個の状態（C）→意識的個我の状態（B）→意識的超個の状態（C）という、文字通り「Uターン」の形を描くことになる。ここに認められるのは、あのPTF-2に他ならない。

こうした姿勢に共通するのは、AとCの混同に伴なうBの誤った位置づけであろう。<図1>にも見た通り、A→Bのコースは論理の行使に向かう行程であり、その意味では「論理への自由の途」ということができるのに対し、B→Cのコースは、論理の超越に向かう行程であり、その意味では「論理からの自由の途」ということができた。「論理からの自由（B→C）」は基本的に「論理への自由（A→B）」を前提し、「論理の自由（B）」それ自体は、通過されるべき門閥として「内的発達（A→C）」のあくまでも中間に位置したのである。われわれは、このBのもつ位置的な中間性と経由すべきその門閥性を忘れ去ってはならない。

PTF-1とPTF-2はさらに広く、オーソドックスな科学に共有されがちな発達像や、オーソドックスな宗教に共有されがちな発達像の内にもその影を落としてはいないであろうか³⁰⁾。オーソドックスな科学にあっては一般に（少くともオーソドックスな宗教と対比して）、自然のままの前個的な合理以前の状態から、個的で合理的な自我の確立に至るならば「上向き」の行程が発達の基本像として共有されていると思われる。他方、オーソドックスな宗教にあっては一般に（少くともオーソドックスな科学と対比して）、合理以後の超個的な状態から個的で合理的な罪深い自我に至る、いうならば「下向き」の行程が発達（あるいは人間の歩み）の基本像として共有されてみられるのではあるまいか。エデン神話に類似したエピソードが、各宗教の中心部分にかなりの頻度で付着して認められるからである。両者はしかし、（一方がAとBのみを眼中においてCを無視し、他方はCとBのみを眼中においてAを軽視する点で）大きくは、先にみたフロイト的姿勢とユング的姿勢のバリエーションの内にあるということができよう。このように、PTFこと「前／超の虚偽」はわれわれの内に、さまざまな局面において浸透し、われわれの見方・考え方方に異様なゆがみとねじれを無意識裏にもたらしてもいるのである。

(b) PTFと意識のスペクトル

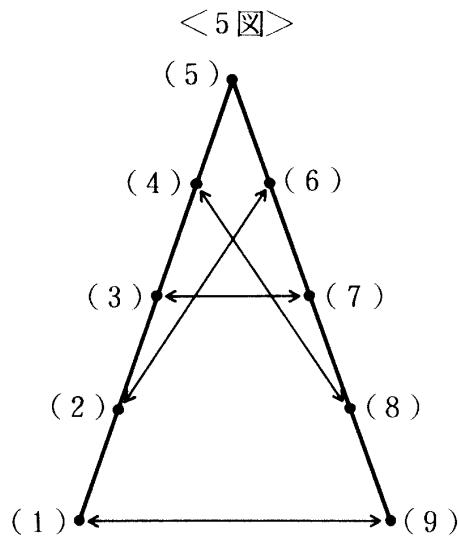
以上にPTFのもつ2つの方向性をざっと視覚化してみたが、PTFそのものは、われわれの意識がもつ構造特性とも関わって都合4つのタイプが考えられるであろう。ウィルバーの示す「意識のスペクトル」によれば、われわれの意識は、その全体を9つの段階に分けることができる。すなわち、自／他の区分のいまだあいまいな合理以前のプレパーソナルなレベル(いわゆるA→B)に位置するところの、(1)「物質（matter）」の段階、(2)「身体（body）」の段階、(3)「魔術的（magic）」段階、(4)「神話的（mythic）」段階と、自／他の区分の確立したパーソナルなレベル(いわゆるB)としての(5)「心的・合理的（mental - rational）」段階、そして、自／他の区分を超えて進む合理以後のトランスペーソナルなレベル(いわゆるB→C)に位置するところの、(6)「身心（body•mind）」の段階、(7)「霊的（psychic）」段階、(8)「微細的（subtle）」段階、(9)「元因的（causal）」段階である³¹⁾。これを図示すれば、以下のようになる<図4>。



さて、第1の「物質」の段階とは、幼児初期に代表される、意識がいまだもうろうとして物質とのカオスを抜け出る以前の、無意識的な融合の段階をいう。ここから、パーソナルに向けて一步を進めた地点にある第2の「身体」の段階とは、見る・聞く・嗅ぐ・触る・味わうといった感覚運動にのみ導かれた、犬、猫、ネズミ等の動物の意識に類比される、「快感原則」の徹底して支配する段階をいう。さらに一步を進めると第3の「魔術的」段階が登場するが、これは、内／外、主／客、部分／全体といった区分そのものがいまだあいまいなため、マジック等に代表される「論理ならぬ論理」のまかり通る精神の段階をいう。ここからさらに一步を進めると、第4の「神話的」段階が現われる。これは、魔術と論理が未分化なままに混在した、今日の神話一般に代表される類いの精神段階をいう。第5のパーソナルな「心的・合理的」段階に先立ってあるのは、以上の4つである。

合理を中心とするパーソナルな段階を過ぎると、次にあるのは第6の「身心」の段階である。われわれのアイデンティティが拡大し、心的な領域に加えて身体的な領域をも覆う結果、自己として意識される範囲が有機体の全体にまで及び、身心の一如性が強く実感されるこの段階は、当の一如性と関わって、ある場合には「ケンタウロス」の段階と呼ばれ、ある場合には「実存」の段階とも呼ばれる³²⁾。このアンデンティティがさらに拡大を進めると、自／他の境界そのものがゆらぎ始め、こうした区分を超えたいわゆる「トランスパーソナルな帯域群」が現われる。この「帯域群」の最初に位置するのが、第7の「靈的」段階である。ここでは、透視、透聴、予言、テレパシーといった数々の靈現象がわれわれに体験される。次いでののは第8の「微細的」段階であり、ここでは、ユングの説くあの元型等が体験される。そして最後に、仏教にいう空体験に色どられた第9の「元因的」段階がある。

以上に紹介した「意識のスペクトル」において、プレ（前）とトランス（超）を混同するPTFは、<図5>にも示したようにおよそ4つのタイプを考えることができる。他でもない、(1)／(9)のPTF、(2)／(6)のPTF、(3)／(7)のPTF、(4)／(8)のPTFである³³⁾。



これらPTFにはむろん、(9)を(1)に、(6)を(2)に、(7)を(3)に、(8)を(4)に「格下げ」するいわゆる<PTF-1>型と、その逆に、(1)を(9)に、(2)を(6)に、(3)を(7)に、(4)を(8)に「格上げ」するいわゆる<PTF-2>型を考えることができるから、PTFそのものは、全部で8種あるといってよい。

自己がいまだ深いまどろみの内にあって、物質との融合から一步を踏み出す前の(1)の段階が、自／他の区分を完全に解消し、自己そのものが「すべてのすべて」と一体化した空体験に代表される(9)の段階に酷似し、端的な感覚運動がすべてである(2)の段階が、アイデンティティの拡大による身心一如のケンタウロス体験に代表される(6)の段階に酷似し、主／客、内／外、部分／全体といった区分以前の、「マジック」に象徴される(3)の段階が、主／客、内／外、部分／全体といった区分以後の、これらのゆらぎと解消に支えられて出現する靈現象に色どられた(7)の段階に酷似し、魔術と論理がミックスした、「神話」に代表される論理以前の(4)の段階が、ユング的な元型の体験される論理以後の(8)の段階に酷似しているのは、何とも奇妙な暗合という他はない。とはいえ、こうした暗合の奇妙さはともかく、ここではさしあたり、PTFそのものがこうしたレベル間できわめて容易に成立しがちな点を指摘するにとどめておこう。これのみでも、PTFの予防にあずかって大なるものがあると思われるからである。

<おわりに>

PTFこと「前／超の虚偽」という形で今日に認められる「カテゴリー・エラー」は、われわれの内界の全体的把握を目指す「サイコの学」が、いまだ充分に開拓のクワを入れているとはいがたい未知のフロンティアとしての「トランスペーソナルな帶域群」から、フロンティアとしての正当性を奪い取りかねない力をもつだけに、われわれ現代人にとって、とりわけ防がれねばならない最たるものひとつであった。そこで今回は、ともかくもこの「エラー」について、ウィルバーに説かれるところを紹介する形で、大まかに骨子のみを披瀝した。その内容、その浸透度、その危険性等々に注意を喚起したかったからである。いきおい論の展開は、説教口調の大味なものとならざるを得なかったような気もある。細部の論証と詰めは今後に譲る他はない。ともあれ、一度は触れねばならぬ問題でもあったので、今回はこれで満足としなければならない。

<註>

- 1) William James, *The Varieties of Religious Experience* (William Jame, WRITINGS 1902-1910, The Library of America-38, New York, 1987), P. 21 (邦訳：舛田啓三郎『ウィリアム・ジェイムズ著作集3、宗教的経験の諸相（上）』日本教文社、昭37、19-20頁).
- 2) 「新しいパラダイムを求めて」の副題をもつウィルバーの『Eye to Eye』(Ken Wilber, Eye to Eye, The Quest for the New Paradigm, Anchor Books, New York, 1983, 邦訳：吉福伸逸他『眼には眼を』, 青土社, 1987年)が第1章と第2章を割いて、角度を違えつつ終始一貫扱っているのは、「カテゴリー・エラー」の問題であり、第7章を割いて展開しているのは、この「エラー」の特殊形態といってもよい「前／超の虚偽」の問題である。これら内容をほぼそのままに紹介する形で（しかしながら、こちらの枠組みと筋立てを用いて内容のまとめ直しを図る形で），以下<1><2>を進めていく。
- 3) 自然科学に代表される研究のあり方は、ウィルバーによって、ある場合には「経験論的・分析的(empiric-analytic)」，ある場合には「経験主義的・実験的(empirical-experimental)」，ある場合には「経験主義的・帰納的(empirical and inductive)」，ある場合には単に「経験主義的(empirical)」とのみ呼ばれている。そこで以下、用語を整理して「経験論的・分析的」に統一したい。なお、「経験主義的(empirical)」と「経験的(experiential)」が厳しく区分されていることに注意。
- 4) 17世紀、イギリスの僧正ジェイムズ・アシャー (James Usher, 1581-1656) は、『バイブル』に基づいて、人間の誕生をB.C.4004年と計算した。この臆説は当時、キリスト教文化圏に属する人びとによって広く信じられてもいた (cf. 『森昭著作集6、人間形成原論（遺稿）』黎明書房, 昭52, 76頁)。またA.D. 535年、キリスト僧コスマスは、その著『キリスト教地誌(Christian Topography)』において、『バイブル』を逐語的に解釈し、地球上には北極もなければ南極もなく、底辺が高さの2倍ある平行四辺形であると断定した (Ken Wilber, ibid., P. 11, 邦訳,

28頁)。

- 5) Ken Wilber, *ibid.*, P. 14 (邦訳, 33頁).
- 6) たとえば、「あらゆる物体は同じ加速度で落下する」という事実もそのひとつ。ガリレオ以前、「重さの勝る物体は、重さの劣る物体より速く落下して当然」と一般には信じ込まれていた。ガリレオはしかし、この通念に満足せず、実験に訴えてこれを確かめようとした。すなわち、ピサの斜塔に登り、同じ大きさの物体を、同じ高さから、同時に落とした。ただ重さのみを違えて。結果は、予想に反して、両者は同時に着地した。こうして、「重い物体の方が速く落下する」という一般通念は、事実によって見事に否定されたのである (Ken Wilber, *ibid.*, PP. 12–14, 邦訳, 30–33頁).
- 7) Ken Wilber, *ibid.*, P.16 (邦訳, 36頁).
- 8) Ken Wilber, *ibid.*, P.17 (邦訳, 37頁).
- 9) Ken Wilber, *ibid.*, P.21 (邦訳, 44頁).
- 10) Ken Wilber, *ibid.*, P.21 (邦訳, 44頁).
- 11) そうした声の代表としてたとえば、聖ボナベントゥラ、聖ビクトル、永遠の哲学等が挙げられるであろう。それぞれが、以下のような区分と命名を行なっているからである。(cf. Ken Wilber, *ibid.*, PP. 2 – 7, 邦訳, 14–22頁)。

<3つの認識能力>	<3つの対象域>	<3つの認識>	
肉の眼	粗領域 (gross realm)	コギタティオ (cogitatio)	外的な下位の光 (lumen inferius/exterius)
理知の眼	微細領域 (subtle realm)	メディタティオ (meditatio)	内なる光 (lumen interius)
瞑想の眼	元因領域 (causal realm)	コンテンプラティオ (contemplatio)	上位の光 (lumen superius)
{ボナベントゥラ による命名}	{永遠の哲学 による命名}	{ボナベントゥラ による命名}	{ビクトル による命名}

- 12) Ken Wilber, *ibid.*, P.29 (邦訳, 58頁).
- 13) Ken Wilber, *ibid.*, P.29 (邦訳, 58頁).
- 14) Ken Wilber, *ibid.*, P.44 (邦訳, 80–81頁).
- 15) Ken Wilber, *ibid.*, PP.44–45 (邦訳, 81–82頁).
- 16) Ken Wilber, *ibid.*, PP.57–58 (邦訳, 101–103頁).
- 17) Ken Wilber, *ibid.*, P.60 (邦訳, 106頁).
- 18) Ken Wilber, *ibid.*, PP.59–61 (邦訳, 105–108頁).
- 19) Ken Wilber, *ibid.*, P.34 (邦訳, 66頁).
- 20) Ken Wilber, *ibid.*, P.32 (邦訳, 64頁).
- 21) Ken Wilber, *ibid.*, PP.72–73 (邦訳, 126頁).

- 22) Ken Wilber, *ibid.*, P.75 (邦訳, 130頁).
- 23) Ken Wilber, *ibid.*, P.75 (邦訳, 131頁).
- 24) Ken Wilber, *ibid.*, P.76 (邦訳, 132頁).
- 25) cf. Ken Wilber, *ibid.*, P. 6 (邦訳, 20—21頁).
- 26) Ken Wilber, *ibid.*, P.202 (邦訳, 341頁).
- 27) Ken Wilber, *ibid.*, P.210 (邦訳, 353頁).
- 28) Ken Wilber, *ibid.*, P.210 (邦訳, 354頁).
- 29) Ken Wilber, *ibid.*, P.211 (邦訳, 355頁).
- 30) cf. Ken Wilber, *ibid.*, PP. 205—207 (邦訳, 346—349頁).
- 31) Ken Wilber, *ibid.*, PP.239—240 (邦訳, 399—400頁).
- 32) 身心の一体化した全有機体意識としての「ケンタウロス」の段階では、（1）緊張のほぐれた豊かなリラックスと自由感が享受されること、（2）今のこの瞬間に充足を見い出して生きるため、数々の取り越し苦労、持ち越し苦労から解き放たれて、今の瞬間にロスなくエネルギーを投入できること、（3）自己の意味、存在の意味への拭いがたい不信と迷いを中心とした内的アーネーイーを超えて、自らの意味あること、存在の意味あることがおのずからに感得されること、（4）とはいえる、身心統一体的自己／外的環境一般（あるいは主体／客体）の境界、生／死（あるいは存在／無）の境界はいまだ取り扱われず、実存主義にいう「他者への怖れ」と「死ないし無への怖れ」は依然として存続すること、の4点が指摘されている。「ケンタウロス」体験はこうして、基本的に、「実存」体験と同列に置かれるのである (cf. Ken Wilber, NO BOUNDARY—Eastern and Western Approaches to Personal Growth —, Shambhala, Boulder&London, 1981, pp. 116—120 .邦訳：吉福伸逸『無境界—自己成長のセラピー論』平河出版社, 1986年, 201—207頁)。
- 33) Ken Wilber, *Eye to Eye*, op. cit ., P.241 (邦訳, 401頁).

Category Error and Pre/Trans Fallacy

—— In Quest of the Theoretical Founding
of Transpersonal Psychology ——

Yoshihiko MURASHIMA

Faculty of Liberal Arts and Science

Okayama University of Science

I-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan

(Received September 30, 1989)

The biological reductionism (or in W. James' word "Medical Materialism") is not only one of the typical trends of our days, but also one of the most difficult hurdles which Transpersonal Psychology has to overcome. Examining "Scientism" which exists under the ground of this biological reductionism, I want to point out two facts : (1) this Scientism which insists Natural Science is not one of many sciences but science itself erres the "Category Error", and (2) the above biological reductionism belongs to a special "Category Error", named "Pre/Trans Fallacy" which confuses our prepersonal state of consciousness with our transpersonal one and reduces the latter to the former.

Basically depending on Ken Wilber's work "Eye to Eye" (especially Chapter 1, 2 and 7), I want to compose this paper in such contents.

<Prologue>

<1> Category Error

- (a) The Examination of Scientism,
- (b) The Possibility of Spiritual Science.

<2> Pre/Trans Fallacy

- (a) Two Patterns of Pre/Trans Fallacy : (PTF-1 and PTF-2),
- (b) Pre/Trans Fallacy and the Spectrum of Consciousness.

<Epilogue>

In <1> (a), I want to discuss how to overcome Scientism, touching some points like the origin of Empirical Science and its general character, the transition from Science to Scientism, the contradictions of Scientism, the three conditions of Knowledge and so on. In <1> (b), I want to discuss whether Spiritual Science can be established as science or not, touching some points like the two different sciences from

Empirical Science (Mental-Phenomenological Inquiry and Transcendental one), the two types of Spiritual Science (Paradoxical-Mandalic Science and Gnostic one) and so on. In <2> (a), I want to discuss the two basic patterns of Pre/Trans Fallacy (named PTF-1 and PTF-2), touching the Freudian posture and Jungian one in Psychology. In <2> (b), I want to show the whole map of Pre/Trans Fallacy, arranging the four types of Pre/Trans Fallacy (each types have PTF-1 and PTF-2) in our Spectrum of Consciousness which has nine stages or levels.